方言地理学による方言形成モデル構築のための覚え書き

佐　藤　貴　裕

1　はじめに

1.1　前提

方言形成モデルを考えるにあたって、方言地理学を念頭においたアプローチをしようと思う。すなわち、地域による言語差（＝方言）の形成を、言語（の諸現象）伝播によるものと想定するのである。そうした前提で思いをめぐらすとき、いくつかの基本的な部分に考えるべき問題点がありそうである。というより、モデルを構築するにあたって、地盤やら道具やら材料やらの確認を、筆者なりにしてみたいという素朴な要請によるものである。

1.2　言語変化

筆者の立場から方言形成を考えるには、新たな語・事象の伝播によって地域的な言語事象の改新を前提とする。そこで、言語変化という現象をどのようなものとして認識しているかを明示しておくことも必要かと思う。おそらく言語変化観なり、言語変化に対するスタンスなりは、研究者各人によって各様に捉えられているように思われる。それをもとに、方法・方針などが編み出されていき、研究者個々のユニークさが発揮されるのであろう。が、その出発点としての言語変化をどう捉えるかという部分において共通理解が形成されていればよいのだが、実際は必ずしもそうではない。今回のプロジェクトに参加した諸先輩とは言語観についてそう大きな差はないだろうと思っていた。が、それはどうやら筆者の見通しの甘さがあったようで、方言地理学という方法論を共有・理解する人々とのあいだでも、言語変化の捉え方に対する差が必ずしも小さくないようであった。もちろん、そうした差とは、研究のありようを多様にすることに寄与しているものと信じるが、では、方言地理学や方言学の場から一歩出て、隣接する言語学分野の人たちにも通じる議論ができるかと言えば、果たしてどうであろうか。言語変化観の大きさを了解するのが精々のところのような気もする。ならばせめて、自分の立場なり立ち位置なりを明示しておいて、論を展開する準備をしておくのが効率的かと思う。

1.3　伝播速度

伝播によって方言が形成される、すなわち地域差が生じるということは、新たな語（言語現象）がすでに波及した地域と、まだ波及していない地域とが存在するということである。つまりは、伝

播の時間差が地域差・方言差として現われるわけである。したがって、方言形成モデルを構築するにあたって、伝播速度について考えることが必要になってくる。もちろん、徳川宗賢・井上史雄らによって、この方面の研究は進められてきたのであるが、なお考えるべき点もあるように思う。

1.4 威光について

伝播という現象の原動力となるのが、言語改新地の「威光」であることはまず間違いのないところだろうが、種々の例を参照するとき、その威光が果たしてどのようなものであるのかが、必ずしもはっきりしないことがある。このような状態では、方言地理学的に方言の形成を考える際の支障となることは明らかである。まず、この点についての問題点の洗い出しをする必要がありそうである。

1.5 地域社会における言語（要素）の改新

新しい語（言語現象）を採用するかどうかは、個人レベルの問題として捉えることが考えられる。しかし、ここで考えようとしている「方言形成モデル」での「方言」とは、やはりある一定の地理的範囲を背景として形成された社会に行なわれる言語ということになろう。したがって、（というよりごく当然のことと思われるのだが）社会（集団）ということを意識しなければならない。そのうえでまた、「個人」の位置づけなり役割なりを振り返ることになるのではないだろうか。単なる個人ではなく、社会における（要素としての）個人ということである。より言語の問題にそくしていうならば、新しい語（言語現象）の伝播が、地域社会に採用されるとはどのようなことなのか、その際、その社会を構成する個人はどのような働きをするのか、ということである。

以上、大まかながら四つの点について筆者なりに考えておきたく思う。この四点、ことに後者三点は、実際の言語伝播においては密接に関わる部分が少なくなく、場合によっては同一の事柄を別の側面から眺めたものであることもありそうなのだが、いま便宜、三つに分かっておきたい。

2 言語変化について

2.1 言葉は変化しにくい

筆者は、言葉は変化しにくいものだと思っている。「移りゆくこそ言葉なれ」との文句は有名であり、それを当を得たものとする向きが多いことも承知している。しかし、言語というものの仕組みからして、言語変化はありにくいはずのものと思う。

```
 ∧∧
(=^-^)   = [neko]
ι( _0_)
```

猫に［neko］という音声連続を対応させて言語記号として用いるわけだが、本来、猫と［neko］とあいだには何ら必然的な関係はありはしない。そこで両者を結びつけるのは、日本語における約束事ということになる。日本語を使おうとする者は、誰しもこの約束事

を守らねばならないわけである。一語だけなら何の労力もいらないが、他にも多く語を、つまりは多くの約束事を心得ていなければ日本語を使うことはできない（文字絵は蒲澤信恵（1999）による）。

そうした状況を踏まえて言語変化ということを考えてみよう。話はまずは簡単である。猫に［neko］を対応させるという約束事を、別の約束事に変えるにすぎないからである。猫の方が別の物（意味・概念）に変わってもよいし、音声連続の方が別のものに置き換えられるということでもよい。が、この約束事を更新するということは、想像以上に労力のかかることではないだろうか。あるいはリスクといってもよいかもしれないが、だからこそ、言語変化という事態は起こりにくいと考えるわけだけれども、以下、いくつか例を挙げながら肉付けをしてみよう。

2.2 約束更新の労力

私たちが普段、他の人々とかわす約束のことを考えれば分かりやすいだろうか。たとえば、一度約束として交わした日時・場所を変更するとする。変更すること自体は簡単である。しかし、その変更は、変更した本人だけが分かっていたのでは何にもならない。約束を交わした人々全員に変更したことが周知されなければ意味をなさないからである。

約束を交わした人々に変更の事実を伝える。一人も漏らすことなく。これは、ちょっと想像しただけでも労力のかかることである。最近でこそ、電子メールで複数の人々にまったく同一の内容を一どきに伝えることが容易になってはいる。が、そのメールを、果たして受け手全員が古い約束の日時以前に読み、うまく対処できるかどうかは保証されていないであろう。電話でなら、かけたその場で約束の変更を承知したかどうかが確認できる。しかし、同じ電話を約束を交わした人の数だけ掛けつづけることになる。掛けたらかならずつながるならまだよい。話し中であったり、不在であったりするとなると、その分、労力はかかるわけである。

言葉の話にしよう。企業は、新製品が開発されるたびに多大な広告費をかけて消費者に買ってもらうよう宣伝する。もちろん、広告に触れた人すべてが購入してくれれば苦労はないが、そのようなことはあるはずもない。そのことは企業の人々もよく承知しており、初めから購入をあてにしているわけではないらしい。膨大な広告費は、全額がそうだというわけではもちろんないだろうが、まずは新製品の名前の浸透に費やされるものと心得ているようである。それもあるのだろう、ネーミングも重視される。記憶に残りやすい、かといって奇抜なだけのものではなく、快く響くものが選ばれるている。社内だけで名をつけるのではなく、その道の専門家にまかせることも少なくないという。相当の労力をかけていることになる。参考までに「労力」を金額で見られる点で分かりやすい記事に接したので引用しておく。

2005年度広告費、前年度比3.45%増

2005年度の有力企業4737社の広告宣伝費は前年度比3.45%増の3兆5009億円となり、04年度に引き続き増加した。企業別ではトヨタ自動車が1029億円と3年ぶりに1000億円の大台に乗せ、11年連続で首位となった。日経広告研究所が、日本経済新聞社の「NEEDS日経財務デ

ータ」を基に調べたもので、対象は上場企業および有価証券報告書を提出している有力企業の合計 4737 社。（中略）

トヨタ自動車、前年度比 26%増で 3 年ぶりに増加

企業別の広告費では、トップのトヨタ自動車（前年度比 26.05%増）以下、松下電器産業(792 億円、同 8.50%増）、本田技研工業（751 億円、同 23.70%増）、花王（565 億円、同 5.20%減）と 4 位まで前年度と同順位だった。

（日経広告研究所ホームページ http://www.nikkei-koken.gr.jp/study/02.html）

2.3 約束更新のリスク

2.2 は、言語事象の例としては特殊な場合であろうが、もちろん、一般の言語変化でも、単に約束の変更にともなう直接的な労力だけでなく、さまざまな面での不利益なり無理なりがあることが予想される。たとえば、現在ではベルトと呼ばれるている装身具は、以前はバンドと呼ばれていた。が、それがいつからかベルトと呼ばれるようになるのだが、筆者の父親などは随分長いことバンドの方を使っていたように思う。やがて筆者も含めた他人がベルトと言うようになるが、それが大げさにいえば心理的な圧力になるのであろう、やがては父もベルトと呼ぶようになっていった。新語や言語変化は、旧語で十分な意思疎通ができている（と考える）人にとっては、まったく不要な厄介事にしかすぎないわけである。

このほかにも、新語を受容した人とまだ受容しない人とのあいだで、行き違いをはじめとする数々の摩擦・軋轢・違和感といった形でリスクが表面化することであろう。たとえば、若い人たちの新しい表現を「言葉の乱れ」と断ずる向きがあるわけだが、こうした反応も一種のリスクの顕在化と見ることができよう。この種のものは恐ろしく根強いことがあるらしい。たとえば、五段動詞から派生した可能動詞（仮定形＋ル語尾）が、カ行変格活用動詞や一段動詞にも波及するラ抜き表現に対する反応がそうである。学界としては、すでに 1960 年代には次のような見解が得られており、すでに回答済みの問題であった。

> この語形は、カ変と一段活用の動詞に可能助動詞「れる」が付いたものと扱うこともできるが、カ変、一段活用から派生した可能動詞として扱うのが適当と思われる。可能動詞は、もとは五段活用の動詞から派生した「行ける」「書ける」のようなものに限られていたのであるが、この種の言い方が次第に多くなって来ており、今泉忠義・中村通夫・松村明・田中章夫等の諸氏も可能動詞として述べておられるように、現在では、この形も五段活用系の可能動詞と同類の可能動詞として扱うのが普通になっている。（神田寿美子（1964））

ところが、一般の人々のあいだではなかなか収まりがつかず、今だに不快感を露わにするものもあるは周知のところであろう。1997 年には「ら抜き言葉撲滅委員会準備会」を名乗るホームページも存在したこともあった（岡島昭浩氏（当時、福井大学）より御教示あり）。このほか、この表現についての抵抗感は、多くの新聞投書記事はじめ多様なメディアで採りあげられたところなので、ここではこれ以上触れない。

2.4 更新の受容努力

このように新語への抵抗力が強いとき、しかし、新語の勢力も衰えないとき、変化にさらされた人はどこかで妥協することになる。「使用者語源」と呼ばれる現象も、そのような状況下で起こりやすいものと思われる。ことに、日本語の知識だけでは語源にたどりつけそうにない外来語においては、しばしば認められるように思う。「ズボンと足をつっこむからズボン」「背が広く見えるから背広」といった解釈などが、幾分かの可笑しみとともに、しかし切実な必要に迫られたものとして発想されたのかもしれない。

ほかにもこの種の努力がなされることは容易に想像される。

2.5 更新の変形

更新の受容努力と、旧語への慣れとが、ほぼ拮抗することもある。新語の方からみれば、旧語を駆逐できなかったことになるが、その場合、少なくとも二つの対処法が知られている。

一つは、新語と旧語とのあいだで意味領域を分担させて、両形とも用いることである。これはこれで純粋に言語事実として興味深い。美濃・尾張地方は、麦粒腫の方言語形にいくつかのバリエーションがあるが、若い人にも支持されるメンボとの勢力が強く、これに共通語形と思われるモノモライ（モノモリャー）が分布しつつある。このように勢力の強い二つの語形は、上の目の縁（目蓋）に出るものと下に出るものとで言い分けることとなった（太田・中川（1983））。ユニークな意味分担を構成するが、おそらくは、目の上下の別によって民間療法が異なることなどから発想されたものであろう。

今一つは、新語（の一部）と旧語（の一部）を融合して第三の語形を生む場合である。もちろん、第三の語形とはいってもまったくの新形ではないけれども。単純にあるいは機械的に（一部を）複合するため、理屈から考えると生じるはずのないものができることがあり、東京のトーモロコシが語源をたどれば「唐＋唐」となり、無内容の複合になっているのが注目される。カタグルマ（←カタウマ×テングルマ）にも同趣のことが指摘されている。もちろん、語源までさかのぼって新形の構成を難ずるのはアナクロニズム的な違和感もあるし、混交を果たしえた背景には、文法化理論でいうところの「意味の漂白（bleaching）」のような、語源意識の希薄化とでもいうべき現象が新語の進入以前に起こっていたとも想定すべきではあろうが。

それはそれとしても、意味分担にしても混交にしても、新語がストレートに受け入れられなかったことに注目すべきであろう。従来はそれぞれ、単に意味論的な興味の点で注目されたり、新語の発生する要因として挙例・言及されたりするものだった。もちろん、今後ともそのように扱われていくのであろうけれど、本稿の趣旨にのっとれば、これら「更新の変形」という現象が起こること自体、言語改新・言語変化が起こりにくいことを示す証左の一つと捉え直してみたい。

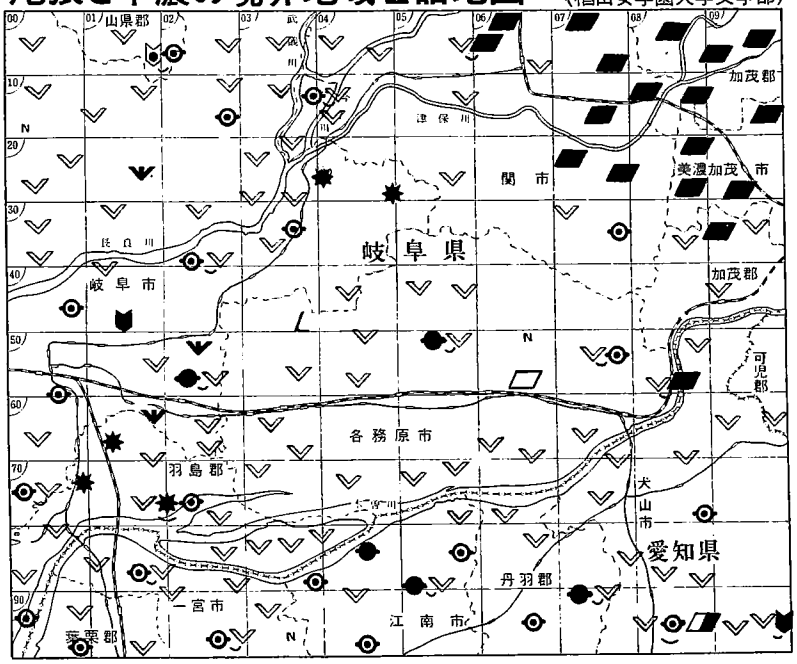
2.6 考えるべき諸点

尾張と中濃の境界地域言語地図

（椙山女学園大学文学部）

図 22

項目
（上まぶたにできる）
麦粒腫（ものもらい）



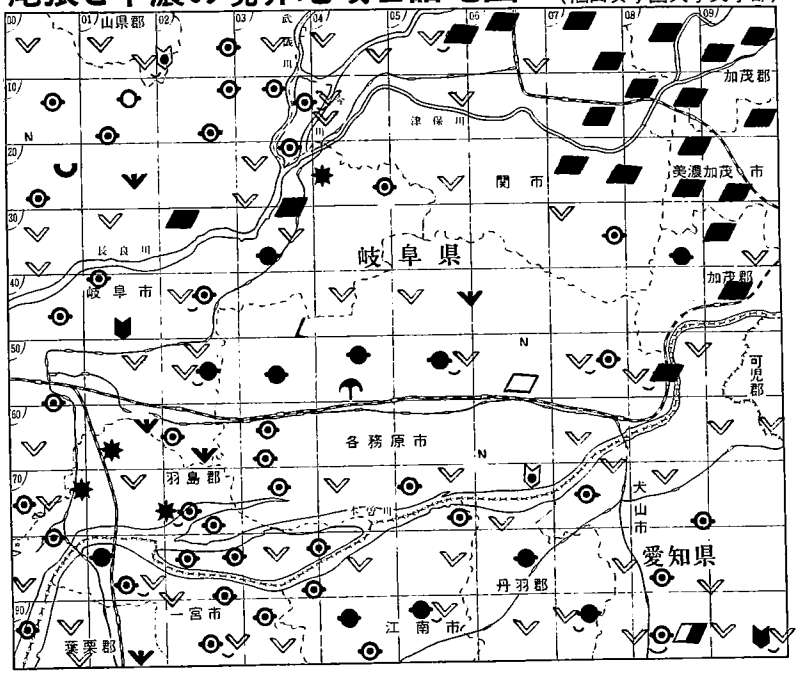
凡例
- モノモライ
- モノモリャー
- メンボ
- コジキメンボ
- コジキモライ
- コジキモリャー
- コジキ
- メコジキ
- コジキイボ
- メチンボ
- フスベ
- N 無回答

尾張と中濃の境界地域言語地図

（椙山女学園大学文学部）

図 23

項目
（下まぶたにできる）
麦粒腫（ものもらい）



凡例
- モノモライ
- モノモリャー
- モノムリャー
- メンボ
- モリャイメンボ
- コジキメンボ
- コジキモライ
- コジキモリャー
- コジキ
- メコジキ
- コジキイボ
- メチンボ
- フスベ
- ウチバン
- N 無回答

「移りゆくこそ言葉なれ」との文句が広く受容されていて、言語変化は頻繁に起こるものとされている。ひいては変化が容易に引き起こされるものと捉えられてすらいるようである。たしかに、若い人の言葉は分からないなどともよく言われるけれども、違っている部分は、共通する部分からすればごくごく少ないのではないか。少ないけれども使用頻度が高かったり、見慣れない音声連続であったり、発想が奇抜であったりするために、違いばかりが強調されて受け取られているようにも思われる。

上にみたように言語変化は、多数の人々とのあいだに結ばれた約束の更新であること、その反作用・副作用が大きいことを思えば、そうやすやすと起こるものではないという見方も十分に成り立つものと思われる。言語変化は、できればないほうが好都合なのである。

さて、こうなると、言語変化に対するこれまでの見方と筆者のとでは正反対になりそうだから、言語変化をめぐる様々のことがらについての言説についても見直す必要が出てくる。もちろん、そうした「言説」のすべてを否定しようというのではない。場合によっては否定しなければならないこともあろうが、見る角度を変えることでもあるから、「言説」の読みを深めることもあうるタイプのものと思っている。

そこで、方言地理学的な立場から方言形成モデルを構築しようとするとき、次のような諸点について、最低限の見直しをする必要が出てくるように思うのである。

・伝播速度について
・威光について
・方言の形成について（言語改新の地域社会への浸透過程について）

3　伝播速度をめぐって

3.1　平均年速１kmという数字

伝播速度を測定しようという試みは、方言形成モデルを構築するにあたって是非とも知っておきたい情報の一つである。早く徳川宗賢（1972）においてなされ、『日本言語地図』を資料として平均年速約１kmと算出している。京都からの伝播を想定するとき、各地方面別に速度が異なることや、当該語形の現れた時期によっても速度の遅速があることを明らかにしている。井上史雄（2003）も、徳川の検討を支持しつつ、さらにいくつかの事例を補足して年速１kmをほぼ妥当な数値とする一方、あくまで平均値としての妥当性を認めるものであって、個々の事例においてはかなりのばらつきがあることも注意している。これらの見解があることから、年速１kmという値は、方言形成モデルを考えるにあたっても、十分に参考となる、現実的な数値だと思う。

ただ一方で、やはり伝播速度の計量・推定には、多くの困難と限界があるように思う。そう思わせる諸点を列挙し、簡単なコメントを付してみる。

3.2 文献資料の性格

伝播速度を測定するには、まずその語がいつ日本に、あるいは対象とする地域に現れたのかを突き止める必要がある。絶対年代が分からなければならないので基本的には文献資料に依ることになる。そこで、文献資料に収められた言語の性格が問題となる。『万葉集』のように、奈良時代においても庶民層の和歌をおさめた資料もあるにはあるが、かならずしも十分な語彙量があるわけではない。ほとんどの文献資料は、年代を遡ればさかのぼるほど、支配者側の言語を反映するものになる。また、規範的な文体が長らく変体漢文体であったため、庶民語が収められにくいということも考えられよう。庶民語が長らく使用されていても、それを掬う器が基本的にはない、ということになるのである。

幸いにも、方言語形と同一のものが文献資料に現れたとしても考えるべき問題がある。はじめから支配層の語として載せられた場合、それが庶民層にまで階層的に下向きに伝播してから地理的に伝播したと考えるとすると、下向きの伝播に要した時間をどれほど見積もればよいのかが問題となろう。場合によっては誤差程度のものと認められることもあろうが、そうでないことも考えておく必要があるだろう。ただ、この種の語の初出年代はまだ正確に確定できる方であろう。

というのは、まず、庶民層の語として使われていた語が支配層の文献に現われる場合の方が、さまざまな点で深刻な問題につきあたるからである。

まず、階層間の上向きの伝播を想定することになるが、その時間をどの程度見積もるかが問題となる。もちろん、階層間伝播を考えなくてよい場合もある。庶民の文化に関心をもつ特殊な支配者が、飛び火的に庶民語を文献に収録することもあるからである。たとえば、今様とよばれる歌謡を収めた、後白河法皇（1127～92）編『梁塵秘抄』などが思い浮かぶところである。

しかし、階層間伝播の結果にせよ、そうでないにせよ、幸運にも文献に姿を現した語であったとしても、庶民語としての初出時期は相変わらず不明ということになる。あくまで文献に現れた時期が知られるだけであって、真の初出時期は知りようがない。したがって、この種の語について伝播速度を測ることは、参考程度でいいならともかく、そこそこ正確な数値を算出することすら、実は絶望的なのかもしれない。

ただ、語形Aから語形Bへの交替が、ある程度以上明確に文献資料でたどれる場合なら、語形Bの初出上限がそこそこ正確に特定できることになる。こうした場合には伝播速度を計測するのに適したものということになろう。逆に、上限が推定できないものについては、伝播速度をはかることは控えた方がよさそうだということになる。

このように、ある一定の原則を設けて、それをクリアするもののみを対象とするような慎重さが求められるものと思う。このことは、古い時代の語ほどあてはまることになる。ここまでの記述からは、語形Aにあたるような先行語形が得られにくくなる、という問題があるからということになる。が、一般論として古い時代の文献資料ほど現存する可能性は低くくなり、得られる用例が孤例となりがちで、正確度が落ちるということもある。また、現在まで長い時間を経ることになるから、地理的伝播の際にも様々な障害なり条件なりで左右されることがあり、正確な伝播距離が測れるか

どうかにも疑問が出てくるからでもある。これはなにも伝播速度を測るときだけに注意されるべきことではなく、広く文献言語史と方言地理学との対照・比較研究においてもつらぬかれるべき、重要な注意点であろう。現在から時をさかのぼればさかのぼるほど、推定の確率は低下するのが、歴史をあつかう学問においてはまずは普通のことであろうから。

3.3 方言地図における併用処理

『日本言語地図』をはじめ、多くの方言地図では、併用回答された共通語形を表示しないことが多い。これは、強大な威光を背景に諸方言を浸食しつつある共通語形を地図に記さないことによって、当該地域の方言語形の分布のコントラストを高めて分かりやすく表示しようとの意図からなされることが多いようである。モノクロ写真の撮影の際に赤・オレンジのフィルターを使って白黒・明暗の差を強調したり、カラー写真の撮影で偏光フィルターを用いて乱反射をカットして、被写体本来の色を写しこもうとするのと同じで、見かけ上の補正ということであろう。

この処理のために、分布実態を捉えにくくしている点がありはしないか、少々心配でもある。この処理がほどこされる意図は上記のようなことと思うが、この処理を実行する前提としては「共通語形がすでに全国的に分布しているから」ないし「少なくとも義務教育やマスメディアの発達により、共通語形に触れる機会が多いから」ということがあるのだろう。

すべての項目が一様の条件下にあるのなら問題はないのだが、併用処理をしなくても明確に方言形の分布が知られるものもあり、そうでないものもあろう。共通語形を理解語として知っているだけで、使用語としては回答しなかった話者もいるだろう。そうした対応のありようは個人個人で異なることもあろうけれど、現実に方言形を盛んに使う地域であれば、個人の指向もさることながら、地域としてのまとまりとしてを示すであろう。

そのように方言形の分布が何もしなくとも濃い項目と、併用処理をしなければ明確な分布がでない項目とを、何の補正もなく等し並みに扱って、伝播速度を測ってしまってよいかという問題があることになる。

3.4 東京語の伝播速度

併用処理がなされた地図に依拠すると、共通語と重なる部分の多い東京語の伝播力は少なめに見積もられることになるから、伝播速度を正確に計測することもほぼ不可能ということになる。併用処理のなされた地図となされない地図とを混用すればなおさらである。

ただ、単純に、東京から当該地に到達した速度を測るのではなく、到達したのち方言形を排除して東京語形しか回答されないようになった度合いを測るということであれば、十分に価値のある測定ができそうである。

3.5 語・事象個々の重要度

経過した時間に比例するように伝播領域も拡大していくであろう。ただし、速度は語・事象の

個々の性質により異なることを考えなければならない。その際に注意しておくこととして、その語・事象の重要度ということがあるだろう。生活を成り立たせるための情報、あるいはより切実には生命の危機を左右するような情報ほど重要度が高いと考えられるが、そうした情報ほど素早く伝播することが考えられる。

もちろん、現代では、そうした情報はマスメディアによって流されるのが普通であろうから、方言地理学がカバーする地を這うような伝播とは別個のものとして考慮の外におくことも考えられる。が、特殊な場合かもしれないが、地を這うタイプの伝播が、相当の速度でなされる場合のあることは知っておいてよいと思う。

まず「口裂け女」の伝播速度を見ておこう。

『週刊朝日』（昭和五四年三月二三日号）によれば、口裂け女のうわさは、五三年の暮れに岐阜県内で発生したが、これが五四年二月に滋賀県東部に伝播し、琵琶湖岸を西下して、三月には京都府に侵入したという。（廣井脩（2001）。参考図版も）

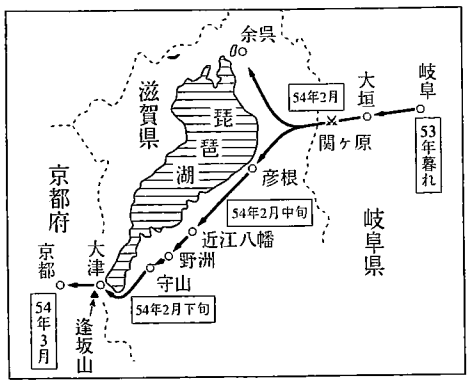


図4 「口裂け女」の流言の伝播経路
『週刊朝日』（昭和54年3月23日号）の図を基に作成

これをそのまま信じれば、岐阜から3か月かかるかかからないかで京都まで達したことになる。岐阜・京都間をＪＲの運営距離を参照してほぼ120 kmとすれば、月速40 kmとなる。年速換算で実に480 km、日速で2.3 kmになる。これほどの速度を獲得したのは、やはりその内容なのであろう。

いろいろなヴァリエーションがあるが、その原型は、マスクをした若い女が通りがかりの人に「わたし、きれい？」と聞き、「きれい」と答えると、マスクをとって耳まで裂けた口を見せ、「じぁあ、わたしと同じ顔にしてあげる」と鎌で口を切り裂く、しかし「きれいじゃない」と答えても、相手を追いかけまわして、やはり鎌で口を裂いてしまう、というものらしい。（同）

一種の噂話であるから人々の好奇心をそそることはあっても、このように荒唐無稽であっては、大人には到底受け入れられるようなものではない。しかし、子どもたちの間ではそうではなかった。自己の存在をおびやかされかねない内容と捉えられたのであった。

このうわさは拡大するにつれて、口裂け女は三人姉妹だとか、一〇〇メートルを一二秒で走るとか、目撃したタクシーの運転手がびっくりして交通事故を起こしたとか、老婆がショック死したとか、さまざまな尾ヒレがついていき、うわさを聞いて学校へ行くのを嫌がる生徒が、各地で続出した。とくに滋賀県の余呉の小学校では、授業を中止して怖がる生徒を帰宅させたところもあり、中学校でも、下校のさい家人に迎えに来てもらうため、女生徒が公衆電話の前

に列をつくるという現象が現れ、また、ホームルームで口裂け女なんていないとうわさを否定した教師が、生徒から総スカンをくうという事態まで起こったという。（同）

冷静に考えれば、かなり異常な状況ではあるのだが、これが事実であったようである。ただし、事は子どもたちにかぎらない。不幸なことに条件が重なってしまえば、大人でも容易に流言を信じてしまい、異常な行動が引き起こされることがある。関東大震災のおりに起きた「朝鮮人流言」がそうであった。

吉川光貞氏の『関東大震災の治安回顧』に記されているケースであるが、同書によれば、「朝鮮人流言」が最初に発生したのは九月一日午後七時頃のことであり、場所は横浜市内山手本町警察署管内だったという。このときの流言は、本牧町の火災現場の周辺から起こり、「朝鮮人が放火している」という内容だった。次いで、同日午後八時ないし九時頃、同種の流言が、隣接する加賀町や伊勢佐木町の警察署管内に波及し、検事、陸軍将校、警察官、住民などがいろいろな場所でこれを聞いている。（中略）翌二日未明には、「朝鮮人」が放火ばかりでなく、強盗・強姦・殺人・投毒など、さまざまな行為を行っているというように拡大してきた。そして、二日の午前中には、横浜市内ばかりでなく、近郊の神奈川町・鶴見町・川崎町方面に拡大していき、二日午後には、これが三つの方向に分岐して東京府内に侵入したという。（中略）そして、早くも九月二日午後には、東京市内全体にこの流言が拡大していった。（中略）さらに二日中には、千葉・茨城・群馬・栃木の各県にもたらされ、翌三日には、とうとう福島県にまで達したということである。（同）

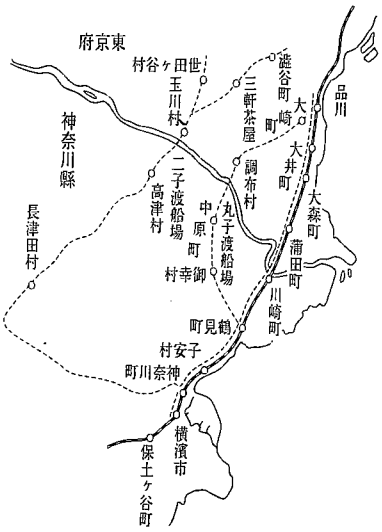


図2　関東大震災のときの流言の伝播過程
（吉河光貞『関東大震災の治安回顧』）

横浜・福島内をやはりＪＲの営業距離で約 300 kmとし、伝播に要した日数を２日とすれば日速 150 kmにもなる。「口裂け女」の 100 倍以上の速さである。あるいは時速で６km強とした方が実感しやすいかもしれない。これほどの速度を記録した以上、方言と同じ様に地を這うような、対面した人間の口から口へと届いたという伝播様態をたどったのかは保証のかぎりではないけれども、少なくとも都心部はマスメディアがまったく機能しない状態であった。

震災当時、電信・電話などの通信線がほぼ全滅し、新聞もまったく発行不能で、鉄道もほとんど動かなかった状況を考えると、わずか一日ちょっとで横浜から福島まで伝わったとは、驚くべきスピードといわねばならない。まさに燎原の火という言葉がそのままあてはまるのであ

る。（同）

「口裂け女」にせよ「朝鮮人流言」にせよ、これらは異常時における特殊例ではあろう。しかしながら、重要な情報ほど速く伝播するという例としては尊重すべきではあろう。このことを出発点として、方言語形・事象の伝播速度を測定する場合には、その語・事象の重要度という尺度を考えてもよいのかもしれない。単純な数式として表現するなら「伝播距離＝重要度×時間×速度」とでもなるだろうか。その係数による重みづけをどのように見積もるか、という方向で研究が進められることはあってよいものと思われる。

3.6　方言地図に取り上げられる語

ただ、方言地図に取り上げられるような語・事象の重要度は低いものであり、低いなかでのわずかな数値の差を捉えなければならないのかもしれない。

というのは、方言地図は、当該地域において二つ以上の語形・事象の変種がなければ描かれることはないわけだが、おそらく重要度の高い語は即座に伝播してしまうであろうから、地域差を捉える前に広く伝播してしまうことが考えられる。逆にいえば、当該地域において変種が認められるような伝播速度の遅い、つまりあまり重要でない語・事象ばかりが方言地図に描かれることになる。当該地域が、都道府県やそれらよりもずっと狭い範囲での方言地図では、地域差を見出すあまり、より一層伝播速度の遅い、重要性の低い語を対象とすることになろう。

3.7　語・事象個々の性格

このように内容が伝播速度に関係するであろうが、別にまた、事例自体のもつ言語的性格によって、伝播速度の遅速に影響する場合もあるし、場合によっては伝播速度をはかりえないことも考えられる。それは、方言地理学の根本である、言語記号の恣意性が保証されない場合である。

『日本言語地図』「肩車」によれば、語形カタグルマは、関東地方の他に、和歌山や岡山などにも認められる。表面上、これらは「飛び火」と呼ばれる現象として認められそうだが、実はカタグルマの周囲には、カタウマ・カタクマなどカターを前部要素とする語形と、テングルマのようにークー（グ）ルマを後部要素とする語形が分布する。したがって、各地のカタグルマは、これらのカターとークー（グ）ルマの混交によって生じた語形だと考えるのが無理がないことになる。このような場合、各地のカタグルマを同一の起源からの伝播を考えることはできないわけである。仮に、こうした例で伝播速度を測るなら、関東地方のカタグルマと、岡山のカタグルマとは別物として扱う必要があることになる。

同様のことはある種の文法事象にも当てはまる。たとえば、カ変動詞やサ変動詞の一段動詞化などは、活用体系の簡素化という変化圧力は、どの方言にも加えられているものと、理屈の上では考えられる。いわゆるラ抜き表現も同様で、五段動詞から派生した可能動詞を有する方言なら、やはり、可能表現の簡素化・単純化の要請があるものと考えられるわけである。こうした変化は、したがって、各地で個別に起こっても不思議ではないものなのであり、ただ一地点からの伝播として考

えるには相当慎重な検証が必要なはずであり、軽々に一点からの伝播を考えることはできないはずである。

もちろん、周到な検証の結果として、それらの変化が伝播によるものとすることはできよう。むしろ、もともと変化しようとする圧力がかかっているわけだから、伝播なり接触なりによって一度変化が誘発されしまえば、あとは連鎖反応のように次々と波及することが考えられる。この場合、相応の伝播速度をとることが容易に考えられる。

さて、別にオノマトペも、やはり伝播速度を計測するにはふさわしないように思われる。ことに、理論的には鳴き声などは特にそのように考えられる。というのもやはり、言語記号の恣意性が保証されていないからである。たえとば、擬態語よりは擬声語がそうであろうかと思うが、これらはその声・音をうまく似せたものを記号化して言語中にとりこむものである。これは、普通の単語において、その意味・概念・機能と、対応されるべき音声連続との関係には必然性がないのが一般であるのと対局にある。意味等に相当する声・音と、対応されるべき音声連続との関係が、むしろ必然性によって結びつけられているからである。そのような場合、先にみたカタグルマやカ変・サ変の一段動詞化と同様、一点からの伝播を考えることには躊躇を覚えるのである。伝播速度を検討する際には、この種の例も一度は考慮からはずすべきでものであろう。

ただ、一旦変化を起こしはじめたら、それが波及する速度は、やはり一段動詞化やラ抜き表現と同様に素早いことが想定されることになろうか。

ところで、『日本言語地図』には、スズメやフクロウの鳴き声の分布図があって、面白いことに相応に固有の分布が認められるのである。スズメの鳴き声におけるチューチューとチュンチュンなどはまさにＡＢＡ分布を構成しており、チューチューからチュンチュンへの変化が明らかに読み取れる。この変化の順序は、実は文献資料からも確認されるところであって、確実な変化の跡を見ることができるのである。

このように非必然度が低いものについても、非必然度の高い他の多くの語と同様に伝播・分布が認められること自体、興味深いわけであり、そうした分布が確認できることから、他の語と同じ手続きによって伝播速度を測ってもよいことになりそうである。しかし、やはり言語記号としての成り立ちを考えると、他の語と等し並みに扱うことには躊躇を覚えるところである。

（未完）

参考文献

井上史雄（2000）『東北方言の変遷』秋山書店
井上史雄（2003）『日本語は年速一キロで動く』講談社（現代新書）
太田有多子・中川玲子（1983）『尾張と中濃の境界地域言語地図集』椙山女学園大学文学部国文科
蒲澤信恵（1999）『ケ～タイ・パソコン絵文字メ～ル』講談社
神田寿美子（1964）「見れる・出れる」。遠藤嘉基・時枝誠記監修『口語文法講座３』明治書院
徳川宗賢（1993）『方言地理学の展開』ひつじ書房

徳川宗賢（1972）「ことばの地理的伝播速度など」。服部四郎先生定年退官記念論文集編集委員会編『現代言語学』三省堂。徳川（1993）に再録

馬瀬良雄監修（2002）『方言地理学の課題』明治書院

廣井脩（1988）『うわさと誤報の社会心理』日本放送出版協会（ＮＨＫブックス）

廣井脩（2001）『流言とデマの社会学』文藝春秋（文春新書）。ただし、引用部分については廣井（1988）と同旨。

日本語方言形成モデルの研究

科学研究費補助金 基盤研究（B）
「日本語方言形成モデルの構築に関する研究」
研究成果報告書

研究代表者　小林　隆

2007(平成 19)年 4 月 28 日　印刷
2007(平成 19)年 5 月 1 日　発行

発行者　東北大学大学院文学研究科　小林　隆
〒980-8576　仙台市青葉区川内 27－1
電話　022（795）5987
E メール　kobataka@sal.tohoku.ac.jp